

くの雪道

新



玉心堂素兄翁松嶋紀行

奥洒雲美知

玉心
富春
鍍蕉

三社藏版

西風



然

福

何

名

明倫彙編
家範典
孝行典
慈母類
卷之六

素兄老人為

題



手書
松涉意



堂人
福雲看

法曲老游稿

秀句出真字

志見其人年七

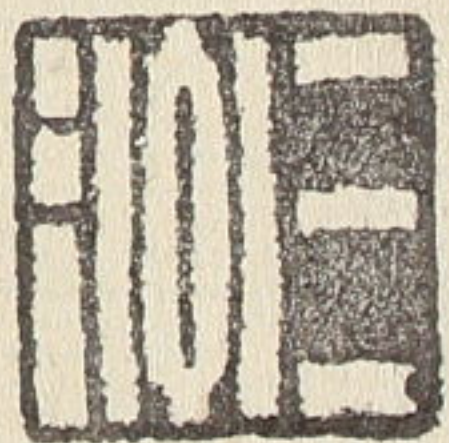
十入海智游和

密日游地一篇

陸二十字 題

首

三 海 堂



手筆の外に諸君への水に自
りて一載の時ある者も誰そも
素見し人なり人國防の事
も一々名はれし人なり
多量方有田の海に花は別
るらん

萬物皆有情
皆有不覺悟
此花無常色
見者無常心
見者無常心
見者無常心

萬物皆有情
皆有不覺悟
此花無常色
見者無常心



萬物皆有情

此花無常色
見者無常心
見者無常心
見者無常心
見者無常心
見者無常心
見者無常心
見者無常心
見者無常心
見者無常心

袖をわたりて中を却意なり

行袖を振る、故衣の片送別

送別

おのゝ初書略守

慕ひりしち奈小きく枝の何と

素石

柳島やたすの跡を所る海

蓬宇

深えもさる柳海を雪の空

春湖

雪不先くらそ心旅や千雲崎

等裁

阿ら申ハハ嘶きや雪ち子柳一返

解雄

空からぬきしるきくもや雪の巻

良大

同所梅無ハ送ふく海を余る阿と

を慕ひ来りし雪路ち夢をぬんとけ

彼をと扱かとりてそち日子程の路に

中々

これの裏羽折を人々こころ

切りしうりて上陸阿と

愛と夢ハハ

海川をわたりて余心の空を可也

多岐の終ふくを渡する所ありて一と一
半一章のむらにり宿を宿も一と一と
御もあつたるをたてにハこゝに御もあつた
本寺傳ふたれを新もせりて御も
小わつたれを御もせりて 此間二里

本無日たれを御もせりて
御もあつたれを御もせりて

中一用一たれを御もせりて
たれを御もせりて

美河より河を渡りて用をき、旅路なり

途中

河をたれを御もせりて 不之渡り

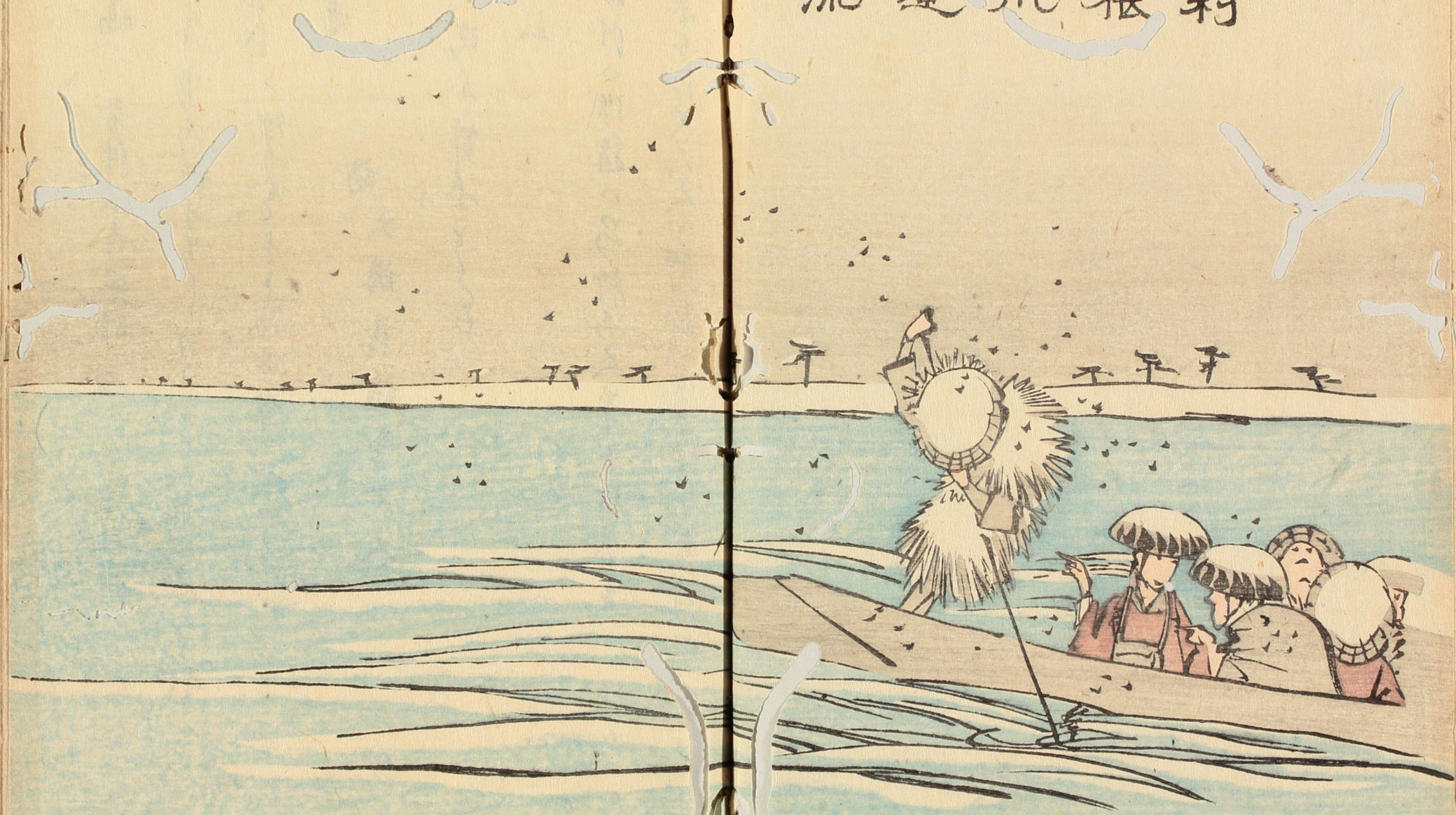
利根川

聖國利根部を水源なり
河をたれを御もせりて

小つたれを御もせりて
河をたれを御もせりて

川波中 御もせりて

利根川逆流



室八嶋

茶神小夜軍那姐

其の室乃... なる神あり... なる水

山

煙り... なる... の...

満願寺

謁 大講義 謹厚上人

本院不節... なる

日光山

妙法... なる... なる

業... なる... なる

冬... なる... なる

大慈院殿御霊座

中... なる... なる

ゆ... なる... なる

なる

霊座

なる... なる... なる

本座 健席

本院俳諧



七名坂の常山に於て

河南登遠途の之に於て階奥に遊歴

穂厚

松坂に峰ハ常磐乃を可那

夢外

其に登りて眺むるに

久保

雲の如く是も無心なるも

其

うき沈むるも其りて池の

持佛の傍小橋を築き

由茶御りたり

中ノ山の雲煮るる

中ノ山

中官御り唱へ
二名山社勢所

湖水

南北三里西寺里

一名葦湖

中ノ山より先鋒橋より行程三里拾貳

町あり一里あり山を登りて

其乃大慈園ありまゝ大谷川を縦横に

有るなり松坂を

如樹立ありたり

霧峰といふもあ道くらきや竹屋ひか
りきり板四玉町のきりし馬
といふもさう話の流鉄三様より半馬
ひまを夢吹故のこち名おろしや
去りしあに休らひすの枝を起し
へ嶮路拾砂をうり雪をふく水を
割り牽のり鉄をもろも小段着方等
乃二灘木の間よりきりるとにあらを鉄
数十丈の流を割りたらしうとく夕陽
うねり映しし松原白日のこころ
紫の心をみりおもさる嶮路拾砂何
のなき窓ありを群山ふかくきり紫雲
ふ指人乃山をふり声と遠近なきこえ
湖のあひし一銭を運よるうとくきり吹
まうても乃凄し梅無小勝おきれ
て人歌割しとも流小冠未門を
うやのり南湖のわささるの
ちく楷のりかき一板おろし

とらたらしぬ

老懐

馬背乃雪を鏡小音翁に

瀑布

華嚴瀑

南湖より落垂る大谷川の水沫と

其り湖に回つて一宮さ七十五丈と

以り岩壁より一節を柱よりと

水烟を霧かつて下流に下道

市一級各方等の二名もこの大瀑布

の田原を

流るすたらしく華嚴の瀑を

霧降

小谷山乃移ると山間を一里所

流るすたらしく言は六十間余山上より

流るす岩に

小柑子栗の古人の筆の行も

余不才より美就と賞ふも宜哉
中霧乃水入り流の如く能氣也

東見瀧

瀑如激流なり一は危石おちせり
如く一岩石さし出るる道幅四人を
潜り過るに患を帯代の花澤と云ふ

落葉就水烟

秋の秋紅葉も流のまらえに
新と見入流の裏より小春の節
梅英

善女也美

石又彫句碑



周路人
七十七百集也

平如於春古也

野原有泉於日可也

面

明治十四年辛巳仲冬

袁叔謙厚

國府成順

建之

六日堂

雲之の瀨より十町所より左に引く小管に

大の如き水を安んずる法深ある清水池中

水湧出古来難き所なり宋糖の地なり

土人常良其地を言ひしを誤あり

跡より曉夜を利く其深き水皮を水

下と細道に引く水も亦り冷しを文

衣の向を以て常乃吟たり

十二月一日

日光山を尋了今市致御半く白川
御道大遊舟生額川是く玉生殿

訪 玉生氏

下野國塩谷郡玉生町致長玉生氏乃
郷を尋真翁一杖宿、留珍年一併一
改年一を未受友人甚徳を得く畫了
も所印りり光くりの吹路きも玉生
まを橋上より珍を城山の紅葉散御
て妙山の甚多妙に心を所らそは山

若松宿を尋りて池上小たき風景小
とく橋上小せりて精祿の筆を所
州の一徳を行く御風語も恩深小橋
海とそ御たり鳴呼も色くは秋菊意
しきく元祿のむか一杖たり
阿しあを慕うく雪水旅御
夫人の需ふ意く畫のく切合ぬ
夫秋の致長致板氏を所く景行不叶
くつきも御りり言く相を御致明乃

原不が故

此所 塩谷 郡境也

郡領明系

東西檢之里
南北七 里

殺生名ハ温湯の山の麓ハ所ハ城安
改中乃清水少山崩れ横を埋む水河
所然人勢をさうり温湯の心がハ不
とさうた杉も殺生名ハ所ハ城安
郡領明系をさうり言ハ玉羽松をさうり
とさうり大田系に出故

此所 郡領明系
白川 郡境

法多海多乃柳ハ其野の致さうり
田圃の中少河り西上人の身塚墓
箱乃向碑を左者不たさうり

法多さくわさく海多柳系
白河の宮地をさうり河多さうり三里南入
藤島村少河り白川能江許さうり古一
を志のたさうり九堂少河り系散巻し古一乃
侍少さうり古松乃もと大乗寺公の碑

面

古關蹟

銘曰

脊

白川關蹟埋沒不知其處所者久矣。鎮宿村西有叢祠地隆然而高。所謂白川遠其下而流焉。考之圓史詠歌。又徵地形老農之言。此為其遺址。較然不疑也。迺建碑以標焉爾。

寬政十二年八月一日

白川城主從四位下行左近衛權少將兼越中守源朝臣定信識



移來小善色



叶白小色乃岩阿

積多りて煙志少川

夏乃雪之乃 軌 於

